

芥川だより

現像なら、芥川商店街入り口の

発行日 *** 2007年12月20日

e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

芥川だよりの定期購読をご希望の方にはお送りします。お気軽にお申し付けください

編集発行人 下村嘉明

発行所

着物から服を仕立てます



☆着物から服へ・リフォームオーダー☆

☆ポイントカードを初めて作りました☆

高槻市芥川町2-14-3 TEL 072-681-8870



冬の炭焼き

秋、農協に米を納めると、農閑期を迎える。私の生まれ育った農村では、この時期に炭づくりをする。ケヤキやクヌギなどの雑木を2週間かけて炭にするのだ。炭は農閑期の貴重な現金収入であった。◆窯は、家から山道を歩いて一時間ほど登った急な山腹にある。山の斜面を利用して削り掘った一坪ほどの窯である。かがんで中に入ると、天上は丸く土で塗り固められている。◆一メートルほどに切り揃えた雑木を窯いっぱい立て掛けた後、焚口を残して入り口を土で塞ぐ。最初は火が全体にまわるようにゆっくり焚き、そのあと火の勢いを強くして焚き続ける。燃やし過ぎて灰にしてしまっただけでは元も子もない。焼き上がった炭が「ケーン、ケーン」と響くように仕上げなければならない。その火

加減は熟練を要する。◆できあがった黒炭を、俵に詰める長さで切る作業が大変だった。顔から頭、手足、口や鼻の中、身体中が炭粉まみれになるのだ。俵に詰めた炭は、毎日家と窯を往復しておろしたものだ。父は炭俵を3俵、母は2俵、祖父は1俵、私は焚き木を背負い、家路を急いだ。◆年の暮れは時雨れやすい。夕方、時雨から雪にかわり、一段と寒くなる。雪が舞い滑りやすい細道を足早に歩く。手がかじかみ、頭や肩に雪が積もる。足元を照らす明かりはないが、微かに積もった雪があたりをほんのり明るくさせる。途中、同じように炭俵を担いだ村の人とすれちがう。「おそうまで気張ってやあ、気をつけて」と言葉を交わして先を急ぐ。家に着けば、私は風呂の水汲み、祖父は風呂焚き、母は夕食の用意、父は牛の餌やり……。◆寒くなると思ひ出す、40年前の冬の生活の一コマである。

芥川商店街歳時記

毎週水曜日 11時30分～12時まで、店頭にて呼びかけをします

「自転車を降りて押して歩こう」運動をします

1月27日(日曜日)11時開演 第10回 楽の会 亀屋寄席 笑福亭三喬&旭堂南陽 ☎685-0123

深奥幽玄手談の交わり

囲碁で豊かな人生を!



日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン

(株)入谷商会経営

日本棋院棋士谷村義行八段による

大盤解説毎月第二日曜日午後2:30より

指導碁毎月第二日曜日午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

「ヤングが日本の政治を唄うなら、老兵は誰だろう。低姿勢ながら皮肉好きの七十一歳の宰相か、ブツツンした六十五歳の「壊し屋」の野党党首か。それとも、若さと病気で挫折した五十三歳の前宰相か…」

私はこの記事を読んでほんとうにうまいこと表現していると思う。こんな記事ならこそ、心に伝わってくる。でも日常茶飯事など、ほんとうに正確に通じないことが多い。

つい先日、この日は会場がとれていないからお休みよ」
「ウンわかった。お休みだね」
「城南宮さんのお祭りにいってこ」

そこまでははっきりした返事があったのに、休みだといった日に会場へ言ったと言う。これには参った。

十人という大勢の人を介さなくても、たった一人の人と話しても話の内容が変わっている。

「あんなだけ休みと思っただけ」と言う。

「ええっ、そんなこと」

私も鈍感になってきて、あまり気にしないことにした。

私も日曜日

「アアそれなのに、それなのにネエ」という唄がよく流行ったものだ。

それから先が出てこない。友達に電話して「歌詞のつづきをおぼえているかな」と訊く。

「そんなひまないわ。のんきなこと言つて。稲刈りの最中なの。今夜考えとくわ」とブツと切れた。

自分は、ゆったり気分でも、先方は汗をかき乍ら、機械を使つて若い人達と働いているのだ。

ああすべて若かりし頃の唄。記憶の中からぼんやり浮かんで来たのだ。

「ネエあなた」でもないんものだと自分かわびしくなってきた。このままでダメだ。てっとり早い盆踊り唄。「ドッコイショ」だったか「チョイナ、チョイナ」だったか、思い出そうとする。

夜を待つて電話する。その友達、唄の事ならなんでもゴザレ。若い娘さんの声、「ふーん題名は？」と。「それがわからないの」と私。「おばあちゃんに聞いときます」。それっきり沙汰なし。

あなたは、日曜日かしらんけど、こちらには忙しい、という心境だろう。ムリからぬ話だ。

一夜明ければ爽やかな秋晴れ。そんな昔の歌なんかどうでもいい。二男いわく「しかし、今更“それなのに”で

も「チョイナ、チョイナ」でもなかるう。哀れな話だなア。バアさん」といって、スタコラさつさと帰ってしまった。

☆ ああそれなのに (美ち奴)

作詞…星野貞志 (サトウハチローの別名)
作曲…古賀政男

映画「うちの女房にや髭がある」主題歌

♪ 空にや今日も アドバルーン さぞかし会社で 今頃は おいそがしいと 思うたに あゝそれなのに それなのに ねえ おこるのは おこるのは あたりまへでしょう

診療所で

老年の先生が電子カルテを使うようになってから

パソコンの操作に四苦八苦 背を丸めて

のぞきこんで居られる姿勢を見て 「何してはりますのん」

ドーンと背中を 押したい気持ちを静めて二十分

やっと気がついたように 今までのように聴診器を当て

「ハイ トントン」後ろを向いて 「ハイ トントン」

「セキが出るようなら薬を出しておきます」
「ハイ これでよし」
先生を見つめる私の表情から目をそらして

「お大事に」

私の顔は笑っているが 目はきつと怒りに燃えているはず 怒った顔はしているが 目は笑っていたかも 目は口ほどにものをいう



大雪山縦走⑨

梵店主

雪の上に敷いたザツクに腰を下ろし、膝をかかえて、少しでも体温を奪われないように身を縮こまらせる。真っ暗な狭い雪洞の中で三人が身を寄せ合って、寒さに耐え、渇きに耐え、飢えに耐え、眠れない。

外はいつ止むとも知れない猛吹雪。二つ玉が一つになって発達した低気圧はいつ北海道から去るのだろうか。北海道から去ったとしても、西高東低の気圧配置が強まって、吹雪がますます激しくなるのではないか。このまま雪の中に埋もれてしまうのか。この暗闇から脱する時はいつくるのだろう。

少し身体を動かすと、ヤツケのすれる音が耳に障る。M蔵はため息をつきながら、腰を浮かせて座りなおす。S太もM蔵も、呼吸の調子から眠れないのがわかる。目は覚めていても、黙ったままだ。もう何時になっただろう、ときどき時計の針を見る。まだ一〇分とか、一五分しか過ぎていない。なんと時間がたつのが遅いことか。時計をみるのはやめた。

水滴が、ポタリと音を立ててよっちゃん腕に落ちた。天井の雪が少し融けている。その箇所を雪ごと手で削って、口を含んだ。冷たい水分がのど元を通って、わずかに渇きを潤した。

入り口を塞いでいるツエルトに雪が積

もると、雪洞は密閉状態になる。そうなる前に、外に出て除雪しなければならぬ。除雪しても、一時間も経たずに雪に埋もれてしまう。外へ出るのはつらい。言うようにして外に出ると、猛烈な吹雪がまっけているのだ。

もう何回除雪をしただろう。よっちゃんは睡魔で意識が朦朧とし、眠りに落ちる接線を行きつ戻りつははじめた。睡魔が伝染したように、S太もM蔵もうつらうつらしている。

三人とも息づかいが激しくなっていることに気づかない。息苦しさより睡魔が勝って、なかなか気づかない。かなり危険な状態に近づいて、身体の酸素不足を補う激しい息づかいになってはじめて、雪洞内の酸欠状態に気づいた。

S太が胸をかきむしりながら「酸欠や」と叫ぶ。一〇メートルを全力疾走した後のような呼吸になった。よっちゃんは急いで外に出ようとするが、入り口にはかなり雪が積もっていて、なかなか出られない。ひよつとすると、このまま息絶えてしまうかもしれない、そんな思いが頭をかすめ、力のかぎりピッケルを入りに突き刺して、外につながる穴を開けた。冷たい新鮮な空気が小さな穴から吹き込んでくる。「助かった！ 空気とはこれほどよいとはいは……」。涙が出た。呼吸

できない苦しさいはいいあらわしようがな

入りの雪を押しつけて外に出ると、

吹雪は止んでいた。時計を見ると、二時を回っている。台風なりに発達した低気圧は、台風なりに予測できない動きを見せて去ったようだ。除雪をすませ、雪洞に入った。もう除雪する必要はない。安心したのか、三人はすぐにまどろみはじめた。

よっちゃんは入り口に差し込む光で目を覚ました。外に出ると、台風一過のような快晴だ。風もない。静かな雪原から、陽が昇りはじめるところだった。太陽を神々しく感じたことはない。「われわれも生き返ったんだ」と全身に生気がよみがえってくるような気がした。

雪洞を抜け出して、一目散にテントを指す。寝不足と空腹、疲労のたまった身体は思うように動かない。風はなく、照りつける陽が暑い。額に汗が流れはじめた。何度も雪を口に含み、渴いた喉を潤すが、汗と呼吸で身体からどんどん水分が失われていく。

視界は果てしなく良好だが、テントが見あたらない。きのうの吹雪で目印の赤旗も吹き飛ばされてしまっていた。地図と磁石でテントの位置を推測して、その方向に急ぐ。二時間あまり進んでも、発

見できない。テントも吹き飛ばされてし

まったのだろうか。

もし、テントを見つけないことができないければ、食糧も水もコンロもない状態で、また雪洞を掘らなければならぬ。そんな余力は三人に残っていない。テントが吹き飛ばされているとすれば、生きて下山することは絶望的だ。M蔵は「次の低気圧が近づいているから、この快晴もきよういっぱいだ」という。なんととてもテントを見つけないならぬ。

「テントは夕べのうちに東の彼方に飛ばされてしまったんじゃないか。俺たちはすでに死線をさまよっているんじゃないか」という恐怖によっちゃんは襲われた。

この大きな雪原は、海原の波のように大小の起伏が無数に重なり合っている。波間に漂流する小舟のようなテントは発見しにくいのだ。そこで、いまいる場所を起点としてS太が立ち、M蔵とよっちゃんは磁石を頼りに東西南北に真直ぐに二十分歩き、またもどつてくるとい

う方法で探すことにした。まず南北に進みながら探す、見つからない。次は東西だ。これで発見できなければ、次の手段を考えねばならない。

「あつたー！」、東へ向かったM蔵が叫んだ。その声を聞いた瞬間、よっちゃん

は安堵感で全身の力が抜けた。テントは、あの猛吹雪に耐えて建っていたのだ。

養女として②

「やまと」の養女となったお袋は、千寿子という名に変えられた。須坂時代の友だちはいまもお袋を「チーちゃん」と呼ぶ。

千寿子は養母の女将に厳しくしつけられる。女将は、「やまと」をますます繁栄させる跡継ぎに育てあげようと、容赦のない厳しさだったという。それにはたいして千寿子は反抗する。気に入らないことは頑として聞き入れない。

つんとして無愛想に反抗する千寿子にたいして、屹とにらみつけ、ますます邪険にあつかった。冷たく刺々しい養母と芸者遊びに入れあげる養父には、情愛というものが感じられない。養母の嘖(さいな)みに千寿子の心はすさみがちだった。

そんな千寿子を温かく包んでくれたのは、養父の母「おばあちゃん」である。眼差しは穏やかで、慈愛に富んだ面もちをしている。「いまの私があるのはおばあちゃんのお蔭。おばあちゃんがいなかったら私はどうなっていたかわからない」というほど、子どもから大人への成長期を生きる千寿子にとって、おばあちゃんはかけがいのない存在だった。

女学校に上がるころになると、茶の

湯や活け花、着付けなどの稽古事が始まる。礼儀作法、立ち居振る舞い、品というものの大切さについて養母から口うるさくいわれたようだ。「あんたより、おばあちゃんのほうがよほど品がある」と胸の中でつぶやきながら、作法を学んだ。稽古事は嫌いではなかった。それは料亭の女将として最低限のたしなみとして身につけることであつた。千寿子は作法を身につけることは大切だと思っていたが、料亭という商売そのものにもどうしても馴染めなかつたのだ。

芸者たちのむせかえるような白粉おしろいの匂い、鼻をつく酒の匂い、酔っぱらいのおふざけ……、どんないやなことにも愛想笑いをしてやり過ぎなければならぬ。そんなことは千寿子にはできない。「ほんとうにこの商売に向かない子だねえ、おまえは」と、養母は千寿子の顔をしみじみと眺めながら、ため息をついたという。

骨董屋や呉服屋が新しく仕入れた品物をもつて、しばしば店にやってきていた。芸者たちが集まった部屋で、呉服屋が幾本もの反物を転がして生地を広げていく。さまざまな模様が次から次へと広げられるそのあざやかさに、千寿子はいつも目を見張つた。芸者たちは気に入った生地があると、手にとつて見入つたり、肩にかけたりする。

お互いの感想を聞き合つて、色や柄について批評する。笑い声が絶えない。どうしようか決めかねている素振りを見せながら、簡単には買いはしない。彼女たちにとつて、そのひとときは楽しみの一つなのだ。

骨董屋にとつても「やまと」は上得意だ。書画骨董を選ぶのはおばあちゃんである。いつも横に千寿子をすわらせた。書画の価値を見きわめる目とセンスを養わせるためである。十いくつもの部屋に掛けられた書や画、壺などの置物を、季節の移ろいに合わせて換えるのも、おばあちゃんと千寿子の仕事であつた。

蔵の中には、茶碗などの陶器や中国の磁器が所狭しと並べられていた。川合玉堂や横山大観、葛飾北斎の絵画が何枚もあつた。掛け軸は百本はくはくはなかつたという。

「やまと」の客の中で千寿子の印象に残っている一人は、太平洋戦争中やってきた県知事である。戦前は選挙で選ばれるのではなく、中央から派遣された。このころ「やまと」の働き手はほとんど召集、あるいは動員され、営業は成り立っていないかつた。衣料や食糧などの生活必需品すべてが極端に不足している時代に、充分なもてなしができるはずはなかつた。

食事前に茶室で千寿子がお茶を点て

た。知事は茶をすつた後、白

富士が描かれた黒茶碗を両手にもつてな

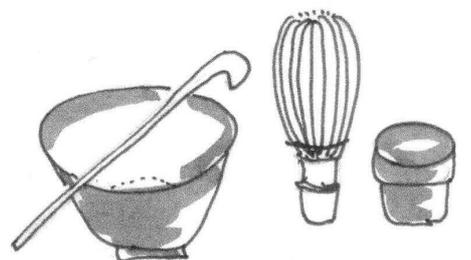
がめ、「これはすばらしい」と感心した。楽家十三代の惺入せいりゅう

が焼いた茶器である。利休の時代から陶工の技が受け継がれてきた楽家の黒茶碗であつた。千寿子は、東京からやってきた知事に教養の高さとあかぬけした品の良さを感じた。

知事は、陸軍の寮として「やまと」を供用に付するよう要請にきていたのだ。戦争遂行のために、人も物も根こそぎ動員された時代である。「やまと」は陸軍の寮となり、一家は松本の浅間温泉にある別荘に居を移した。

昭和十八年になると、兄は学徒出陣で召集され、中国戦線に送られていった。千寿子は、未婚の女性によって編成された女子勤労挺身隊に入った。

太平洋戦争の緒戦は日本軍の勝利に終わったものの、やがて戦局が転換し、南太平洋の島々では敗退、海戦では次々と大打撃を受けて、このころには敗北の色が濃くなつていった。



釣りいろいろ④

いか(烏賊)①

周防春日丸

いかは漢字で「烏賊」と書く。「烏」と「鳥」を間違えていませんか。黒くて目がどこかわからないというので、鳥の目の部分の一面を略した字が「烏」なのである。

「烏賊」の語源・由来は、いかが死んだふりをして水面に浮かんで死んでいるのか、いつも水面に浮かんで死んでいるように見えるためか、それをカラスがついばもうとした時、巻きついて水中に引きずり込んで食べたという中国の言い伝えによるもので、カラスにとつて恐ろしい賊のようなものという意味から「烏賊」となったとあった。でもどうしてカラスなのかと思ってしまう。カラスは餌となる小鰯が魚に追われて波打ち際に寄ったのを捕っているのは見たことがあるが、それほど沖では見たことがないのである。たまたまいかががち(陸)に寄って来ていたのだろうか…

他にはいかの姿形から「いかついで(厳つい)」「いかめしい(厳しい)」「いか」「い」は白(い)こと、「か」は堅(い)こと、いかはタコに比べてよく泳ぐことから「いか(行か)」などがある。

◇魚あれこれ◇

いか釣りは船でやる。船釣りは鰯から鯛釣り、鯛は釣れずにグチや、驚いたことにノウソウブカ(ホシザメ)という鰯が釣れたり、冷凍のイカナゴで餌となるイカナゴが沢山いるなか、それでもイカナゴでパンパンにふくれたホゴメバルが釣れたり、釣れなくなった途端船酔いすることもありながら、一時期病みつきになったのがいか釣りである。

まずはスルメイカ。初夏の夕方、明るいうちにポイントに行き、電気をつける。釣り方を教えてもらいながらイカ掛けを下げる。底をとってから少し上げておびく。潮が速いと流れて底がとれずに糸がどんどん出て行く。当たりがあったと喜べば底にあたっている。ああでもないこうでもないと繰り返す。

返すうちに実際に当たりがある。重たくなつてコクコクする。嬉しさのあまり逃がすものかと慌てて上げる。途中で軽くなりコクコクもしなくなる。逃げられたのである。時にはちぎれた足だけが上がってくる。しかしそうこうしているうちに不思議なものである。体が覚えるというのか分かってくるのである。習うより慣れるのである。

いかには墨がつきもので、釣り上げて船に取り込むとき、掛けからはずすときなど要注意。これが慣れてくると、水面で墨を吐かせてから取り込むと墨を吹きかけられることも少なくなる。日も暮れて暗くなった頃電気の明りのせいか、いかが浮いて来て何を間違っていたかある。

釣りたいかはもちろんお刺身、残りは一夜干しに。ビンを転がしてのして手作り干しスルメを美味しくいただく。

タコ釣りのもやっつてはみたものの、シヤクリが弱いのかいつも途中で逃げられる始末。結局一度も顔を見ることはできなかった。

いかとタコは外見上よく似ている。おもしろいことにいかには目蓋がないけれどタコにはあるというのだが、そう言われてみるとあったような気がしないでも…よくよく見て確かめたものである。

戸隠蕎麦

十月の終わり、恩師に誘われて戸隠へ蕎麦を食べに出かけた。標高一五〇〇mの戸隠神社に向かつて、曲がりくねった坂道を車でぐんぐんのぼっていく。秋晴れの陽ざしをあびて、黄や赤に色づいた木々の葉がまぶしい。

起伏の多い白樺並木の道が急に勾配を増したあたりで参道に入る。早くも客が並んで待つ人気店を横目に、お目当ての店へ急いだ。

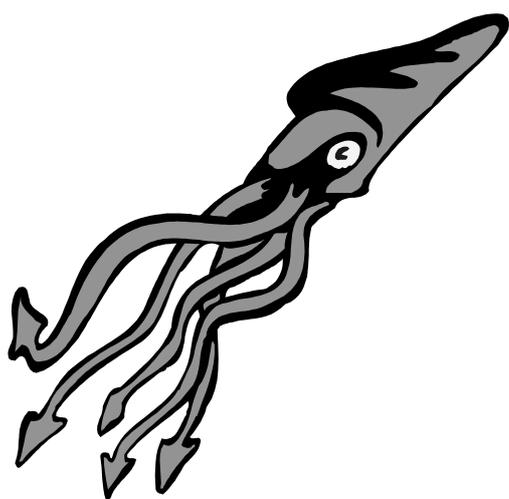
「しなの屋」は地の人がよく来る蕎麦屋だ。秋採れたての新蕎麦、大ザル一枚を注文する。文句なしに美味い。

京都で、勧められて三、四軒の店で蕎麦を食べた。美味いと思ったことは一度もない。京都では蕎麦は食べないことにしている。

戸隠神社は、江戸時代までは比叡山と関係の深い修験道の郷だった。維新のときの廃仏毀釈で神仏分離がはかられ、神仏習合の修験道は大きな打撃を受けた。仏像がことごとく破壊されたのだ。戸隠も例外ではなかった。

奥社へつづく参道には熊笹が群生し、杉の巨木が立ち並ぶ。この叡山横川にも似た森の奥に、修験者たちは山の霊力を感じとったのだろうか。

戸隠は何度きても飽きることがない。好きな場所の一つだ。



明けましておめでとぅございませう

明石 幸次郎

私たち団塊世代は、子供の時代から新しい年を迎えた正月になれば「一年の計は元且にあり」と、両親、学校の先生などから「今年の計は何か」「今年の抱負は何か、何を守るのか」と言った、何か継続して自分の成長に繋がる「誓い」「約束事」を紙に書いたり、言わされた習慣がありました。今は余り家庭でも、学校でも、このような事は余り言わなくなったような気がしません。まして況や会社などでは？

私が会社に入って八年目の年の一月に工場勤務から海外輸出部に転勤になりました。その翌年の初出勤に、辣腕部長で知られていたK輸出部長が課長以下部員五〇人程全員を会議室に集めて「新年の抱負又は新年の計」を全員が一人ひとり皆の前で述べよと言う行事？がありました。えー会社に入ってから、こんなこと言わないといけないのかと一瞬怯むと同時に、子供の頃から、このような新年に何か抱負なり、計を立てても、私の場合は殆ど三日坊主に終わっていて、親からは「お前は言うだけや、もう守ってない、継続力が足りん、意志が弱い、兄貴とエライ違いや」などと新年の計を親に言

った早くも一月の中旬頃に散々言われたことを思い出しました。このトラウマを一瞬に思い出し「あかん、あかん、出来もしないことを言うのは、自ら墓穴を掘るだけや。又、子供の時のように出来ないことを言ってしまったために、怖そうなK部長に責められる。まだ新しい職場に来たばかりで、仕事も分らんし、当たり障りのないことを言ってお茶を濁す方が無難や」と心に決め、自分の番が来るまで言うことを考えました。

次々に先輩社員のみならず、後輩社員も自分のやりたい事は何か、売り上げ拡大にはどう自分がやらねばならぬか、今年の自分の目標は担当国、全てを二ヶ月間かけて回り市場調査を行い、拡販方針を立案したいなどと、数字を交え理路整然としかも簡潔に自信を持って述べていました。さて、私の番が回って来ましたが、結局は考えが纏まらないまま、何を言って良いのか分からずに「私の抱負は出来るだけ早く、新しい仕事を覚えて、海外出張に行かせて貰えるようになりたいです」と、八年目の中堅社員にしては新入社員並みのありきたりのことを言い何とかその場を凌ぎました。まあこれなら今年中には、実現出来るだろうとの魂胆で、しかも、K部長からもそれを実現しなかったからと言って転勤したば

かりで責められないだろうとほっとした半面、こんな自己主張の強い、個人的な自信満々なメンバーばかりの部署でやっていけるのだろうかと不安になってきました。

一人ひとりの言うことを大学ノートにメモしていたK部長は最後に、自分の抱負と事業に対する夢を簡潔にしかも具体的に説得力のある内容で話し、その後メモしたノートを見ながら、誰とは言わずに悪い事例として、私の抱負を挙げ、抱負に具体性がなく、しかも夢がない、新しい職場に来たからこそ、今までの経験を活かし、こうやったらとはったりでも皆の前で言うことで、自分を追い込み、それが自分の成長に繋がるのやと、明らかに私の抱負に対してやる気が感じられないと言うコメントを述べました。会社という処は、分らん処や。そんなもん、転勤したばかりで、今年の抱負を言えといきなり言われても、そんなの子供の時のトラウマが邪魔して言えるかいな、とK部長に対する反発と、自分が出来ることならお茶を濁す内容で切り抜けようとした魂胆をこの人に見抜かれたと言う恥ずかしさで下を向いて小さくなっていました。

自席に戻ると、隣の席の東京外大出の輸出部生え抜きの後輩N君が、「明石さんK部長が言ったこと余り気にする



ことはないですよ。皆は毎年の初出勤はK部長の前でこの一年の誓いを述べることが、初出の恒例になっているのが分っているのです、正月休みにああでもないこうでもないと考えて来るのです。明石さん、年末にA課長からその話しはなかったのですか？」と優しく慰めてくれました。「N君有難う。A課長からは一言も聞いていなかったが、まあ聞いていたとしても今日言ったような内容しか言えなかったわ」と答えました。

その日の夕方になって、K部長から声が掛かり、今晚付き合えということ、外大でのN君とこの人の行きつけの小料理屋に行きました。又、昼間のことを酒を飲みながら蒸し返されるのかと思っていたら、「明石さん、まあ、飲めや、今日はどうやった。輸出部というところは自分で仕事の絵を画いて自分で絵を仕上げる楽しみがあるところや、やる気のある社員は、やりようによっては面白い部署やぞ。来年の、

「君の抱負を楽しみにしておくわ」と昼

間と違う柔和な顔で気落ちしていた私を励ましてくれました。後は仕事の話は一切なしで、酒は明るく飲まない駄目だと、その後二軒ほど梯子をして夜中の一時に自宅にたどり着きました。

それから八年間は、この初出勤を教訓にして、この人の下で鍛えられました。現在の海外部門の売り上げは、私が居た二〇年前の二〇倍の連結で六千億近くにもなって、全社の売り上げ、利益の断トツのトップに成長しています。その基礎、レールを敷いた功労者はK部長であります。部下を煽って、赚し、仕事をやらせ、部下を育て、自分の夢を“その年の抱負”を年の初めに皆の前で宣言しそれを実現させた優れた指導者でした。私もこの人に煽られ、アジア市場拡大に“一年の計”を実現すべく動き周り、多少は貢献したと正月を迎える度にK部長を思い出しながら、自分を慰めています。皆さんの“一年の計”に纏わる思い出は如何でしょうか。

処で、「今年の一年の計は何ですか」と頑張れよっちゃんに聞かれそうですが、この「サラリーマンエッセイを続けること」がその答えと致します。私の子供の頃のトラウマを克服するためにも頑張りたいと思います。

〈余談〉

新年を迎えるまでの準備や正月のしきたりには、それぞれ謂れがあります。

正月とは本来、お正月様という年神様を迎えて五穀豊穡を祈る農耕儀礼であつたといわれています。年神様は豊作をもたらす穀霊、または稲作を守る先祖の霊といわれ、年神様に供えた神饌を下げて祝食するのが正月の食べ物とされています。

現在の“おせち”というのはもともと“御節供”^{おせちく}の略で、神さんへの供物を家族揃って食べる“直会”^{なおらい}から発祥しているといわれています。

正月の準備は、姿形が見えない年神様を我家に迎えるために厳かに行われたものでした。十二月八日または十三日の事始で煤払いをし、三十日までに大掃除も新年の準備も全てすませます。大晦日は静かに心身を清めて、一日の終わりとされる夕方から一晩中起きて年神様をお迎えすることが正しい年越しのしきたりです。大晦日に早く寝てしまうのはタブーとされています。

大晦日と元旦は掃除もすべきでないといわれていたのは、箒で掃くと家に訪れた年神様を追い出すことになってしまうからだといわれます。

(明石 幸次郎)

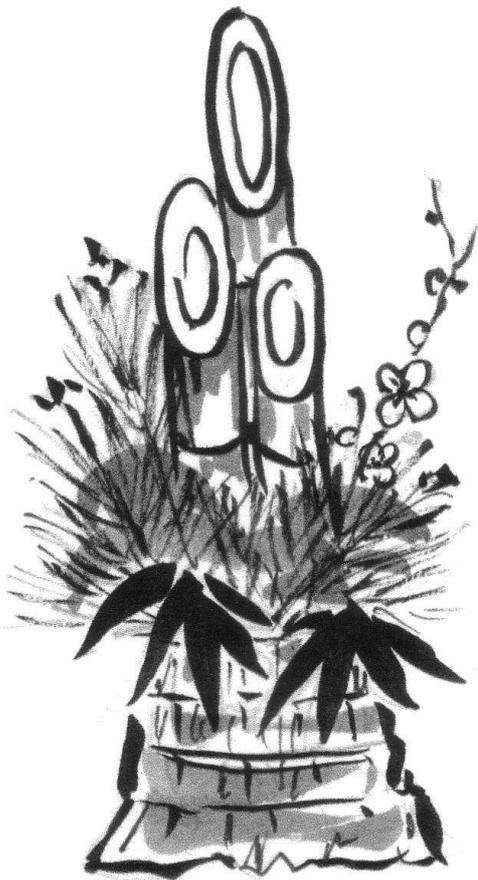
「クイズ」

次の①～④の文は、幼稚園・学校・公民館の所在地（現在）に関する記述ですが、正しいものはどれでしょうか？

- ① 高槻市立芥川幼稚園は、芥川町一丁目にある。
- ② 高槻市立芥川小学校は、芥川町二丁目にある。
- ③ 大阪府立芥川高等学校は、芥川町三丁目にある。
- ④ 高槻市立芥川公民館は、芥川町四丁目にある。

クイズの答えは11ページに載せてあります。

(福嶋 努)



見えざる悪魔 有機リン(一)

山彦海彦

紀ノ川が奈良県から和歌山県に流れ下る県境に五條市があります。金剛山の山裾がなだらかな斜面になり河岸へと続くところに開かれた町です。

話は六〇年ほど前に遡ります。患者の健康のために野菜の青汁を勧めていた医師がいました。有吉佐和子女史が『複合汚染』の中で紹介している故梁瀬義亮氏です。

梁瀬氏は戦時中、機械化部隊の従軍医として送られたフィリピン戦線で部隊が全滅し、最後の一人となります。やせ衰えた氏を殺そうと近づいた住民に逆に助けられ、奇跡的に復員しました。その住民は英語の話せる敬虔なクリスチャンであり、今まさに殺そうとしている梁瀬先生との宗教的な問答からその高潔な精神を知り、動けぬ先生を背負って安全な町まで送り届けたのです。

帰国後は尼崎の病院に勤めておられました。昭和二十五年(一九五〇)に始まる朝鮮特需で日本の産業が復興しますが、公害が酷くなり、梁瀬氏は喘息で健康を害されるのです。家族と共に故郷に引き揚げ、五條市で小さな医院を開業されたのです。

その頃、健康維持のために野菜の青汁がとても効果あると岡山の遠藤仁郎医師が提唱されていました。梁瀬医師も患者にそれを勧め、自らも実行されていたのです。でも、その健康法はある時期を境に徐々に健康を害するようになりました。

昭和二十七年頃より、青汁をよく飲むご自分や長男の健康が優れなくなり、野菜嫌いでそれを飲まない次女が一番健康でした。野菜の味が変わったことに気づいていた氏は、生産農家を訪ねたところ、驚くべき事が行われているのを知りました。なんとその栽培には有機リン系農薬の「パラチオン(商品名ホリドル)」が近代的農法として使用されていたのです。しかも、つや出しと日持ちをよくするために出荷時にパラチオンの溶液に野菜を浸けていたのです。健康被害はこれが原因だと確信した梁瀬氏は、ご自分の身体で人体実験に踏みきり、身体のみならず脳神経に深刻な障害をもたらす慢性毒性を発見しました。

『複合汚染』で有吉女史は朝日新聞の資料から、この農薬が使用されてから禁止されるまでの一〇年間で四万人以上がノイローゼや鬱病になって自殺されたのではないかと推定されています。その恐るべき害の一例を梁瀬先生の著書『生命の医と生命の農を求めて』

から引用しましょう。

「私は往診を頼まれ〇本家を訪れた。この家は村でも名のある旧家である。七十歳を越した老夫婦は一人娘を迎えた真面目で温厚な養子と三人の孫を相手に幸福な農家の生活を送っていた。ホリドル散布が実施されるようになって、養子はその人柄を買われてホリドル散布指導員に任命された。彼は上からの指示通り、ガーゼのマスクと長袖姿、ゴム手袋姿でホリドルの霧の中で活躍した。

私が往診した時、彼はうめきながら寝ていた。ホリドル散布後五日にして、はげしい全身倦怠感が現われたので床にいたが、苦しみは増す一方であった。肝臓は大きく腫れ、圧痛が甚だしかった。私は一生懸命手当した。間もなく黄疸が現われた。ホリドル中毒後の黄疸はなかなか治癒しにくいのである。三ヶ月も経ってやっと彼は治癒した。

ところが治癒後、彼の性格はがらりと一変した。今までの温厚さはどこかへ消えてしまつて荒々しい癩癩持ちの人間になって、ちよつと気に入らぬことがあるとすぐ銚や鎌を養父に投げつけるようになった。又仕事嫌いになった彼は、ぶらぶらと遊び廻り、挙句の果ては子供を捨てて妻はすでにホリドル自殺していた、家をとび出してしまつ



た。

彼の妻(この家の娘)は、主人の病氣中私がかれぐれもやめるよう注意したにもかかわらず、夫に代ってホリドル散布作業を行った。夫の事件にこりて、彼女は特に嚴重に防護装備をした。散布後二、三日は体がだるくて床にいていたが、いつの間にか回復した。ところがそのうちに次第に彼女はノイローゼ様症状を示すようになり、へ

く私のところへ連れて来られた。かつての彼女とは全く別人のようで、ぼんやりしてじつと何も言わなかった。

ホリドール中毒による精神障害と私は診断して手当を加えた。

或る日彼女は、理由もないのにホリドール自殺をってしまった。

幸福な、平和な旧家が、かくしてこの悪魔の贈物のために不幸の中へ消えていった」

梁瀬医師は被害を受けた農民とともに農薬を使わない農業を模索し始めました。何年も虫害で収穫が半減し、協力農家の苦境に心を痛めました。それでも農家の方達は先生を信じて無農薬農業を続けたのです。苦闘すること七年あまり、ついに完熟堆肥という考え方に到達し、満足な収穫を得るようになったのです。先生は日本有機農業研究会の創立メンバーの一人となりました。今でも先生が創立した農作物の自販売組織「慈光会」は五條市にあります。

パラチオンは昭和三十八年頃に禁止されました。その後不正使用されたパラチオンで農薬被害にあったリンゴ農家の惨状を伝えるNHKの「白いリンゴ」というドキュメントもあります。しかし、毒性は弱められたとはいえ同じ有機リン系農薬が、今でも多く使われているのです。

十一月二十三日付

産経新聞朝刊に載る

大阪版の元気宣言というコーナーに「芥川だより」を取り上げて頂いた。

あわただしい結婚

昭和十八年は、大阪の嫁ぎ先への訪問、九州旅行、そして結婚、彼の召集……私にとつて忘れられないことの連続でした。

旅行好きな私は、お小遣いを貯めては、一人で泊まりがけの旅行をしたり、ハイキングに出かけたものでした。姉の外出には口うるさく注意をする両親も、私の旅行には寛大でした。「あなたはしっかりしているから、一人でどこへ出かけても心配ない」と意外に私を信じて、何も言わずに送り出してくれたものです。そんな両親ですから、私が草深い大阪へ嫁ぐことにも反対しなかったのでしょうか。私自身、大阪に御縁があるとは夢にも思っていませんでした。

鹿児島で応召される友のご主人をお見送りしましたが、それはいつか私自身の身にも降りかかってくるのかも知れないなどは考えもせず、暢気なものでした。

その頃は、物資の流通や価格、配給、労働などいろいろな経済統制が社会のすみずみまで及んでいたのです。

取り締まりが厳しく、どんなものでも手に入りにくい時代でした。生活必需品である食糧や衣料も不足して、みな飢

えていたのです。ましてタンス、布団、衣装などのお嫁入り道具なんて、簡単に手にはいるはずがありません。母は随分頭を悩まして、あちらこちらに手回しをしたり、尋ねまわっていました。つい先ごろまでお店に並んでいた品物がいつのまにか自由に買えなくなっていたのです。

衣料品は点数切符制でしたので、点数の余裕のある人から分けてもらって、衣類を手に入れました。着物一枚つくるのにも大変な苦勞をしましたが、どうにか嫁入り道具をそろえたのです。

そこへ姉にも縁談話がもちあがって、父や母はとても頭が痛かったであろうと思います。母は、娘の嫁入り準備のために毎日のように外出して、タンスや衣類を探し回り、そのうえ生きていくための食糧も手に入れなくてはなりません。店には使用人がほとんどいなくなりまして、母は生活が大変だったと思えます。まだ貸家がありましたので、暮らしに多少のゆとりはありました。

「八月中には目鼻をつけて、九月に入ったら荷物を大阪へ送りましょう。それからお世話になった方や近所とお別れ会をして、ちよつと早目に大阪へ行つてどこか宿屋さんを定めておかなくてはね」と母は次から次へと結婚準備を進めてくれました。私は預かっていた洋服の

仕立てを急ぎ、九月に入るとトランクへ衣装を詰めたり、持参する物の準備をしました。

昨年のお見合いからいままでを振り返ると、目まぐるしいほどいろいろなことがあり、時が経つ速さを実感します。そして今頃になって、嫁ぎ先の大阪へは車で十二時間もかかるんだなあという遠い距離感を感じました。

大阪へ行く準備がすっかり整って、出発を待たばかりの九月二十六日、朝早く大阪から電話が入りました。「今朝、召集令状がきました。二十八日に入営です」というのです。「つきましては、縁談を解消していただきたい」と私は驚いて「えっ！ どうしたらいいの？」と母に尋ねました。「召集令状がきたので、結婚は白紙に戻しましょうということでしょう。よかったじゃないの。あなたも、あんな田舎で暮らせないといっていたし。あなたの考え次第よ。やれやれ、止めましょう」と母はあっさりいいます。

ですが、私はそれではすみません。「ちよつとお母さん、私に考えさせて」と、誰もいない屋上に上がって一人で考えることにしました。母も「後悔しないようにね」と念を押してくれました。いくら考えても、この際になつて止めましようなんて薄情なことは、江戸っ子エンちゃんの気風に合いません。縁談を解消しましょうといわれて、そうしまし

ようというのは簡単だけれど、いわれたほうは、意外に冷淡な人だったんだと受け取るかもしれない。結婚式を待つばかりというところまできて、召集があつたら止めましようでは、必ず後悔するに決まっています。

戦地に行くあの人、もしかしたら帰つて来られないかもしれない、内地にいてもこれからどうなるかわからない、のちのち後悔するよなことだけははしないようにしよう、と決心しました。

屋上から下りて、「お母さん、後悔しないように、予定どおりに大阪へゆくことにします」と母に告げました。私は急いで、用意してあつた洋服に着替え、トランクを提げて、「できたらお父さんとお母さん、後から来てね」と東京駅へ向かつたのです。

母が電報で、私が京都に到着する時間を先方に知らせていましたので、翌二十七日の朝京都駅に着くと、彼が迎えに来ていました。私が来たことをとても喜んでくれましたのを思い出します。

何しろ時間がありません。明日二十日には入営です。彼だけでなく彼の兄さんも同時に応召でした。

高槻にあるお寺で壮行会をするのと、壮行会と同時に簡単に結婚式を挙げたのです。東京から父と母もきて、盃を交わして賑やかな宴となりました。あすの朝は早いからとみなに勧められ、私へ

くたち二人は部屋へ引き上げました。父と母はしばらく彼のご両親と歓談したあと、そのお寺に泊めさせていただきました。

私たち二人は、茨木の彼のお寺に帰ることにしたのです。明日の朝はご両親にきちんとあいさつをし、自分の家から出発するのがいいからです。

一里ほどある真つ暗な夜道を、手を握りあい寄り添って帰りました。忘れられない思い出です。家へ帰って入営の準備をすませ、疲れきって倒れるように横になり、彼の腕の中でまどろんだのを思い出します。

翌朝は目覚ましのベルで大急ぎで起き上がり、井戸端で洗面してから如来様にご挨拶します。本堂におひかりを燈すと、彼は大きな声で念佛、合掌です。私も合掌しながら念仏を称えました。彼の口から「恩徳讃」のおうたが流れ出しました。私も合わせてうたいます。うたい終わると、合掌して私に「よろしくたのむ」と言われました。私も「自分のできる限りは頑張ります」と合掌してお答えしました。

六時半には家を出なければなりません。八時入隊でした。「何かあったら連絡するから」と兵舎の門前で別れました。

私は一人で家へ帰り、横になるとすぐに深い眠りについていました。

盆石展を観て

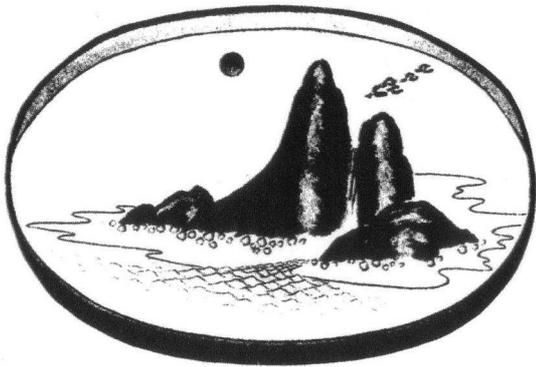
先日京都御池駅ギャラリーにて、細川流盆石を観た。二回目になるが、すばらしい時間を過ごしました。

パンフレットによれば、黒の盆の上に自然石で山々を表し、白砂をふるい。羽根、小さなホウキで海や川の流れを表す日本伝統芸術の一つです。又、京都御池ギャラリーにて、十二月二十二日～一月十七日までお正月をテーマに展示会が開催されます。一度御覧になってはいかがでしょうか。

期日： 十二月二十二日～一月十七日

場所： 地下鉄烏丸御池駅改札上階

連絡通路 市民ギャラリー



川柳

真本嘉代子

☆サンケイの紙上に映える梵店主

☆年の瀬に追われて揺れる我がつとめ

☆健康で除夜の鐘聞き年を越す

「芥川だよりハイキングのお誘い」

十二月は、吉峯寺に五人で行ってきました。天気も良くて、京都の市街地や東山が一望できました。一万三千歩歩きました。

一月は休みます。二月よりしますのでよろしく願います。

お正月の雑煮振る舞い

来年の正月・元旦。朝十時から雑煮振る舞いを梵の店頭でおこないます。都合のつく方は来て下さい。

今年の元旦に、初めて雑煮振る舞いを行ないました。和知の田舎のお袋に相談したら、喜んで餅と白味噌を作ってくれました。



「クイズ」の答え。正解は④です。

①の芥川幼稚園も、②の芥川小学校も、ともに、真上町一丁目にあり、③の芥川高等学校は、浦堂一丁目にあります。

「芥川」という土地の名称は、古くは、かなり広い地域のこととして使われておりました。現在とは大違いだったので。

芥川小学校は、明治六年（一八七三年）に創られていますので、百三十年以上の歴史を有しています。現在の日吉台小学校・郡家小学校・川西小学校・真上小学校の校区の子どもたちは、むかしは、みんな、芥川小学校へ通っていたのです。芥川小学校の校区の範囲は、今と比べるとずい分と広がった訳です。

現在、「芥川」という地名が、町名として使われているのは、「芥川町一丁目く四丁目」と「南芥川町」とだけになっております。（福嶋 努）

やると言うから皆さんに食べてもらいたらいだろうと思いつきました。「芥川だより」に協力頂いている眞糰さんを始め皆さんの協力のお陰で楽しく出来ました。八十食分食べていただきました。「芥川だより」へのカンパ箱にも沢山の寄付を頂きました。来年の元旦も皆さんの協力を得てやります。お神酒も出ます。楽しい話を聞かせて下さい。寒いとは思いますが、来て下さい。

「携帯エッセイ」
お前は歩兵か

母が死んだ。大正二年生まれ。九十四歳だった。二十八歳で夫を戦争に取られ、亡くした。戦後は四人の幼子を抱え苦労した。アンコ（日雇い）に出て、公園の仕事などをして糊口を凌いだ。

痴呆になつてからの方が、戦争を妄想することが多かった。私に「お前は歩兵か」と聞いたことがあった。

戦争は惨い。つくづくそう思う。(龍)



募集します。貴方の思いを
一八〇～二五〇文字位で
貴方の心のつぶやきをお送り下さい
アドレス